

対者との間に文法なく、彼は却って人間の学の命題を崩壊さす者たることを覚ったとき、ガリラヤの野の百合に天父を語った人を見出した。その人の言はそのまま学ではなかったが、教父は野の百合とロゴスの関わりをそこに見出し、神学として今日の我々に遺している。それは我々への愛しき遺産であり、しかし文法なく命題をこぼつ者に向かおうとする我々にとって十字架ともなっている。

意見

加藤 武

このたびのシンポジウムは主題が〈中世における神秘思想——教父とその遺産〉という興味深いものであり、しかも谷、熊田、大森教授のいずれも高度に専門的なご研究をふまえて、しかも共通のものをさぐる、という知的冒険にいどまれる素晴らしいものであった。筆者はこの領域に不案内であるが、副題に免じて、意見を述べご教示をたまわりたい。

質疑応答がすすむうちに、宮本教授から、壇上に活けられた百合の花をさして、三人の提題者にむけて共通の質問が出された。それはこの花を見て、どのように神秘への道筋を開かれるか、を問うものであった。まさに共通のものを、共有しつつ、対話をおこなう場を設定する意図からの優れた問題提起であったと思われる。これにたいしてなされたお三人の回答はそれぞれに興味深くあったが、とりわけて、熊田教授は、言下にいいはなったのである。「わたしにとりこの花は神様です。わたしもこの花を見ることから、またそのうちに、神秘を経験します」と。このとき百合の花が、はじらい、いささか、くれないに染まらなかったか、それは知らない。筆者にはこの問題提起はきわめて興味深いものであったけれど、同時に二つの疑問が生じた。

問い 1 神秘経験の出発点はどこか。

2 神秘経験を研究する研究者はどこに位置するのか。

1について、とくに熊田教授がたんに『神名論』の否定神学にとどまらない領域が、

『神秘神学』にみられることを指摘され8個の単語が「神のことばの神秘がひめられている」という主文章を修飾していることに言及されていることは、神秘が言語現象の秘密にかかわりをもつことを暗示する。つまり、ことばというプリズムをはなれて神秘に迫ることは不可能ではないか、ということである。白百合の花は言葉のレベルで何を語ったか、それを、お三人にうかがいたいのである。(この質問は一色教授の提起に共通する)

2について。われわれ研究者は、はたして自分の中に、経験を共有することをめざすのか。めざすべきであろうか。われわれがテキストを読むという行為は、はたしてテキストの経験をもう一度忠実に再現することなのだろうか。むしろわれわれは、はるかな距離をこそおぼえるのではないか。読むとは、読者のつめたい距離感を前提するのではないか。

以上は、あるいはとんでもない誤解や、筆者の無知や、中世という歴史的背景を考慮にいれない粗暴な意見である可能性が大きい。しかしあえて花園に爆弾、いや、線香花火！を仕掛ける次第である。